

## “public”と“private”の戯れ ——ゲイ批評の視点から

金田仁秀

『ドリアン・グレイの肖像』が1890年 *Lippincott's Monthly Magazine* に掲載された際、新聞各紙がこの物語を非難したのに対してワイルドが応戦したことは有名であるが、彼らの批評に言及しながらワイルドはコナン・ドイルに送った手紙のなかで、“The newspapers seem to me to be written by the prurient for the Philistine.” (*Letters*, 292)と述べている。こうした反ジャーナリズム的見解は『ドリアン・グレイの肖像』の論争に始まったものではなく、彼がアメリカツアーを行っていた時期にも見られる。ワイルドを商品として戯劇的に扱う彼らに不満を漏らしながら、例えば “[I] saw nothing of America but newspapers” (Ellmann, 168)と述べている。彼自身や作中人物のこうした発言は非常に多く、ワイルド=反ジャーナリズムという図式は容易に浮かび上がる。しかしながら、彼がジャーナリズムと親密な関係にあったことも同様に明らかである。彼は1887年12月から2年足らずの間 *The Woman's World* の編集を引き受けた。また、それ以前や *The Woman's World* 編集中にも *Pall Mall Gazette* や *Dramatic Review* といった新聞、雑誌に批評を投稿している。また、彼が自らを宣伝したのはまさにジャーナリズムというメディアを通してであった。こうしたことを考えると、初期の自己宣伝から、裁判報道を通したワイルド身体へのホモセクシュアリティの書き込みまで、ワイルドという一つのテクストはジャーナリズムなくしては語れないといってもいいであろう。

Regenia Gagnier が *Idylls of the Marketplace*において、ワイルドのこうした側面を消費社会との関係で論じていることはよく知られている。彼女はダンディに、自らを商品化しながら批評的であると同時に商業的に競争せざるを得ないアイロニカルな面を見、そこにワイルドの姿を重ねる。こうした消費社会、大衆文化といった社会的な言説とワイルドの戯れ、或いは彼女の言葉を使うならばジレンマについての論を踏まえて、本稿では、ホモセクシュアリティの観点から当時のジャーナリズムとそれに対するワイルドの反論と関与が示し出す両義的なスタンス

“public”と“private”的戯れ

を考察したい。そして、歴史的な視点で、統制的な異性愛体制を問題化する彼のポリティックスを考えてみたい。

\*

19世紀の初めから19世紀末に至るまで、新聞、雑誌は常により多くの読者を獲得するという使命によって動かされていた。それには価格を下げることと読者に魅力的な内容を提供することが大きな柱となっていた。安価な雑誌や新聞ができ上がるにはいくつかの壁があったが、長い議論を経て、1855年に stamp duty が廃止、1861年には paper duty が廃止され、アン女王の時代から続いた税の重荷から新聞、雑誌は解放されることとなる。<sup>1</sup>これによって、1856年に *Daily Telegraph* が一ペニーで出されたのを皮切りに、*Standard*、*Daily News*、*Daily Chronicle*、そしてワイルドが寄稿していた *Pall Mall Gazette* や *St James's Gazette* といった各紙が一ペニーで出されることになる。これは、中流階級の誰もが日刊紙や週刊誌を手に入れることができるようになったということを意味している。労働者は、1890年代にならないと読者層には組み込まれていない。したがって、後に取り上げる『ドリアン・グレイの肖像』の論争は、中流階級が読んでいた安価な新聞紙上で行われたということになる。

新聞、雑誌の発行部数は、Jonathan Rose によると、1837年には56,000部であったのが、1887年には12倍以上の680,000部にまでなった。このことは、19世紀を通じてジャーナリズムが大きなイデオロギーへと成長していくことを示している。そしてこの動きは、19世紀末になってさらに加速する。マシュー・アーノルドが1887年に “New Journalism” という語で形容した、大衆消費社会に訴え、実際の政治にまで影響を与えるようなジャーナリズムが形成されるのである。ワイルドは「社会主義下の人間の魂」において、“In the old days men had the rack. Now they have the Press.” (1188)と揶揄しているが、それは誇張ではなかったのである。

“New Journalism” の旗手とされるのが、*Pall Mall Gazette* などの編集を手がけた W. T. Stead であるが、彼が1885年7月に書いた連載記事 “The Maiden Tribute of Modern Babylon” は、少女売春のルポータージュとして多くの読者を得、1か月後に制定されることとなる Criminal Law Amendment Act に影響を与えたといわれている。<sup>2</sup>アーノルドが警戒したのは、新聞、雑誌のこうした大衆間の流通と政治との結びつきであった。実際、Stead は、*Contemporary Review* に1886年に掲載した “The Future of Journalism” と題する評論において、ジャーナリストに求められる資質や民衆や政治との関係について述べ、“the very soul of our national unity” (329)と

しての新聞を唱導する。これはまさにイデオロギー装置としてのジャーナリズムである。そして、ワイルドが罰せられることとなる Criminal Law Amendment Act が彼の記事に左右されたとするならば、19世紀末において新聞、雑誌は強力な権力を有する社会制度となっていたといえよう。このような状況を踏まえると、文学や芸術を民衆と切り離そうとするワイルドが、アーノルド同様、ジャーナリズムを批判の対象としたことは、自然な成り行きと考えられる。そして、その批判がもっとも明白に現れるのは「社会主義下の人間の魂」においてである。

『ドリアン・グレイの肖像』が *Lippincott's Monthly Magazine* に掲載されたのが 1890 年の 7 月号、本として出版されたのが 1891 年 4 月、その序文が *Fortnightly Review* に掲載されたのが 1891 年の 3 月号。この間に、『ドリアン・グレイの肖像』を巡る新聞紙上での論争が行われているが、「社会主義下の人間の魂」が *Fortnightly Review* に掲載されたのはまさにその最中の 1891 年の 2 月号であった。したがって、この論考はドリアン・グレイ論争の影響を少なからず受けているといえるであろう。実際、個人主義を通した理想的な社会主義社会の成立という逆説的に見える主張を論理的に進めながら、中盤から後半になると芸術と民衆が対立的に捉えられ、そこから民衆と結びつくジャーナリズムが批判されていく。社会主義を求めるこの論では、Stead が唱えるような民主主義は当然、否定される。ワイルドは、“unhealthy” という自らの作品を受けたジャーナリズムの言葉を持ち出し、民衆がそう呼ぶ小説とは美しく健康的な小説であると述べ、彼らは言葉を誤用していると糾弾する。それは個人主義を理解しない権威、“authority”、“Public Opinion” と呼ばれる無知なものに起因するとされるのである。ここにいたって、ワイルドのジャーナリズム批判はピークに達し、民衆、ジャーナリズム、権威、イデオロギーは、個人主義と芸術の敵として断罪される。

We are dominated by Journalism. . . . In England, Journalism, except in a few well-known instances, not having been carried to such excesses of brutality, is still a great factor, a really remarkable power. The tyranny that it proposes to exercise over people's private lives seems to me to be quite extraordinary. The fact is that the public have an insatiable curiosity to know everything, except what is worth knowing. Journalism, conscious of this, and having tradesman-like habits, supplies their demands. . . . The harm is done by the serious, thoughtful, earnest journalists, who solemnly, as they are doing at present, will drag before the eyes of the public some incident in the private life of a great statesman . . . and invite the pub-

lic to discuss the incident, to exercise authority in the matter, to give their views, and not merely to give their views, but to carry them into action. . . . The private lives of men and women should not be told to the public. The public have nothing to do with them at all. (1188-1189)

Stead の記事から Criminal Law Amendment Act へという “New Journalism” を象徴する出来事を思い出すならば、この一節は、まさにそうしたジャーナリズム社会への真っ向からの反発であることが分かるであろう。ワイルドがそうした動きにいかに苛立ちを感じていたのかは、彼らしくなく民衆とジャーナリズムを一元的に見ていることからも伺える。芸術 = “private”、ジャーナリズム = “public” という二項対立が明確に浮かび上がるのだ。

しかしながら、この対立は「社会主義下の人間の魂」という作品が、*Fortnightly Review* という雑誌に掲載されているという事実によって脱構築される。もちろん、この雑誌はフランク・ハリス編集のラディカルな雑誌であり、一ペニーの新聞とは違う。しかしながら、ワイルドの批判が単なる新聞ではなく、ジャーナリズムと民衆全体に向けられていることを考えると、自らもその対象として絡め取られてしまうのである。ワイルドとジャーナリズムの関係が示し出す社会的、歴史的な言説とは、まさにこうした両義的な空間である。それは、彼の作品自体にも浸透する戦略的な戯れとして立ち現れる。

「嘘の衰退」や「芸術家としての批評家」においても彼は民衆を否定し、“personality” や “individualism” といった言葉を使って芸術を私的な領域と結びつけようとしている。しかしながら、ワイルドは、芸術を決して民衆や社会に閉ざしてはいない。それは、彼が批評家、芸術家に時代を変えていく力を見出していることからも明らかである。そもそも、批評とは私的な読みの行為を、公的空間に開くことに他ならない。ダンディの資質とは社会の許容範囲でそれを広げるという Michael Gillespie の指摘を思い出してもいい。ワイルドの態度とはそのようなものである。芸術家、批評家にとって、民衆のいない真に空虚な空間などあり得ない。端的に言って、Terry Eagleton が指摘するように、ワイルドが芸術の領域と切り離そうとするのは “clutches of bourgeois morality” (338)に過ぎないのである。しかしながら、その試みでさえ、ジャーナリズムとの関わりによって脱構築されていく。ここに Marion Thain が指摘するような芸術と消費社会のパラドックスを見ることも可能である。<sup>3</sup> そして、Gagnier のようにワイルドのジレンマと説明することもできるかもしれない。しかしながら、彼はこの両義的な空間で戯れるとい

った方が適切である。それは、公的な領域たる新聞、雑誌に生涯に渡って深く関係していく彼の姿から浮かび上がる。ワイルドの詩が最初に発表されたのは雑誌上であるし、1885年から *Pall Mall Gazette* に寄稿した評論は100近くにのぼる。さらに *The Women's World* の編集。そして忘れてはならないのは、「社会主義下の人間の魂」だけではなく、「芸術家としての批評家」や「嘘の衰退」、『ドリアン・グレイの肖像』といった、劇と童話を除く彼の代表作は、まず雑誌に掲載された後、本として出版されているということである。『ドリアン・グレイの肖像』の論争に場を提供したのも、新聞、雑誌であった。獄中でもワイルドは時折新聞を読むことができ、出獄後すぐ *Daily Chronicle* に獄中生活の悲惨さを訴える手紙を書き掲載されている。こうしたワイルドの姿は、大衆に開かれた公的な場を揶揄しながら、それに積極的に関与していくものである。ワイルドの場合、ペイターやアーノルドに比べると、雑誌投稿の態度が全般的に軽いと Laurel Brake は指摘しているが(45)、彼は、ジャーナリズムとの関わりをシリアルに捉えるのではなく、そこに見出だすことができる両義性と戯れるのである。

ここで重要なのは、“public”と“private”的境界の浸食は、ジャーナリズムの言説 자체が内包しているという点である。ジャーナリズムとは、一般的に共通に開かれたもの、社会性、公益といった“public”的領域にあるものと考えられる。それは、社会という場に情報を公的に所有させるものである。しかしながら、既に述べた新聞、雑誌の低価格化によって、それを家庭という私的な領域で私有することが可能になっていた。もちろん、情報は共通であるからその意味では公的なものであるが、様々な種類の新聞、雑誌が発行されるようになったことで、その取捨選択がより私益に根ざしたものとなったことは確かである。さらに、Hilary Frazerらが指摘するように、消費社会における雑誌の成功の鍵は雑多性にあったならば、一つの新聞、雑誌の中からも私的な選択がなされていたといえる。

こうした状況は、ワイルドにおける“public”と“private”的境界の脱構築と対応する。そしてこれはホモセクシュアリティの言説とも関係している。というのも、1885年のCriminal Law Amendment Actとは、性別を規定しない“sodomy”という行為から、“public”だけではなく“private”な場での男性同士の“act of gross indecency”を禁じる法であったからである。先に引用した「社会主義下の人間の魂」の一節で、ジャーナリストが人々の私生活を公の場に暴露することをワイルドは批判しているが、この法は、ホモセクシュアリティという私的なセクシュアリティを、公的な場に晒し出すという、まさにジャーナリストイックな言説に支えられていたのである。

“Blackmail Charter”とも呼ばれたこの法は、1889-90年にCleveland Street Affairで用いられた後、ワイルドを牢獄へ送ることになった。この法が制定された5年後、Cleveland Street Affairからは数ヶ月後にワイルドが雑誌に掲載したのが『ドリアン・グレイの肖像』である。これが引き起こした論争では、芸術や道徳、民衆といった、これまでに見たワイルドとジャーナリズムの関係に現れた事柄が繰り返される。さらに、新聞各紙は様々な言葉を用いながら、セクシュアリティの言説を絡ませ、ワイルドもそれに対して快楽というエロティックな言葉で応戦している。216の批評のうち、3つだけ取り上げたとワイルドは *Scots Observer*への手紙で述べているが、そのやり取りは、“public”と“private”を巡る争いと読むことができる。これはまた、公的な領域に取り込まれるワイルドと同時に、形式上私的な手紙を用いて、ホモセクシュアリティの言説を公的な場に浸透させ戯れるワイルドを映し出している。

3つの新聞のうち最も早くワイルドが返答したのは、*St James Gazette* の悪意ある批評に対してであった。*St James Gazette* は、『ドリアン・グレイの肖像』を “dull and nasty” と形容し、フランスのデカダンスのようであると論じたが、見逃してはならないのは男性性の問題が内包されていることである。それは “plucking daisies” や “drinking ‘something with strawberry in it’” といった表現を嘲笑的に取り上げることに現れている。*St James Gazette* は一ペニー新聞として、中流階級のイデオロギーを示し出すのである。それに対し、ワイルドは “The sphere of art and the sphere of ethics are absolutely distinct and separate.” (*Letters*, 257) という有名な一節で反論し、さらに “advertisement” という語に反駁して、商品化されること、すなわち “public” な領域に芸術と自らを晒すことに異議を唱える。そして、“I wrote this book entirely for my own pleasure” (*Letters*, 257) と述べ、イギリスの大衆 (“The English public”) との断絶を試みる。芸術という私的な領域に、快楽を重ね合わせるこの議論は、*St James Gazette* の批判と照らし合わせて読むと興味深い。というもの、ここでの快楽は(ホモ)セクシュアルなものへと繋がる可能性を示唆しているからである。

こうして始まった *St James Gazette* のやり取りは、この後4回続くことになるが、2度目の手紙においては、この批評には「個人的な」悪意があるとして、再び “public” と “private” の絡み合いが持ち出される。その後で『ドリアン・グレイの肖像』の道徳について語られるのであるが、奇妙にもワイルドが提示する論とは、“All excess, as well as all renunciation, brings its own punishment.” (*Letters*, 259) という、明らかに中流階級的な道徳である。そして、健全な心を持っている人には

その道徳が分かること述べ、“healthy”を民衆に結びつけ、ジャーナリズムだけをそこから引き離す。Daily Chronicleに対する手紙でも同様の主張がなされ、ドリアン・グレイは極端に衝動的で異常にロマンティックだと、中流階級的な視点で否定的に述べられる。実際、Christian Leader や Christian World といった新聞は、この小説にワイルドの説くような道徳的教訓を見出している。ワイルドのこうした搖れは、芸術と道徳を元に、“public”と“private”を分けようとしながら、両者の境界を自ら浸食させるものである。さらに興味深いのは、Scots Observerへの手紙に現れる主張である。そこでは、芸術家は道徳的な共感を持たないというしばしば繰り返されるワイルド流の発言をしつつ、ドリアン・グレイを道徳的な腐敗の雰囲気で取り囲む必要があったと中流階級的な道徳観を提示する。その上で、“Each man sees his own sin in Dorian Gray. What Dorian Gray's sins are no one knows. He who finds them has brought them.”(Letters, 266)と述べることで、道徳的基盤自体を再び崩してしまう。つまり、“private”から“public”な道徳へ、そして再び“private”な領域へと、両者の間を行き来するのである。

小説中、ドリアンの罪はバジル殺害を除いては描かれていない。ホモエロティックな欲望についても、バジルの告白以外は明示されていない。しかしながら、この小説が取る戦略とは、不在の中に、不在としてホモセクシュアリティを流通させるものである。それは3人の“private”な関係、ドリアンの“private”な罪、閉じ込められた“private”な肖像画が、クローゼットの外と内に見え隠れするなかで示唆される。ゲイのポリティックスでいうならば、『ドリアン・グレイの肖像』は、カミング・アウトと戯れているといえるであろう。新聞各紙が、この小説の中にホモセクシュアリティを直接的に見出して糾弾するということがないのは、Alan Sinfieldなどが指摘するように今日的なホモセクシュアリティの言説が形成過程であったという事実とともに、この小説が取るそうした戦略に起因する。と同時に、各紙の批評が、中流階級的なセクシュアリティの規範からの逸脱に向かっていることは、随所に散りばめられる用語から伺える。この点で、Scots Observer の批判は Cleveland Street Affair を仄めかしたものとして重要である。

The story — which deals with matters only fitted for the Criminal Investigation Department or a hearing *in camera* is discreditable alike to author and editor. Mr. Wilde has brains, and art, and style; but if he can write for none but outlawed noblemen and perverted telegraph boys, the sooner he takes to tailoring (or some other decent trade) the better for his own reputation and the public morals. (75)

中流階級のセクシュアリティから逸脱した“noble men”と“telegraph boys”的“unnatural”な欲望。『ドリアン・グレイの肖像』はドリアン、ヘンリーという上流の人物と、中流階級的な道徳観を示しながらもホモエロティックな欲望に駆られるバジルの物語である。他方、各紙は中流階級の言説に支えられている。そうであるならば、『ドリアン・グレイの肖像』において私的な領域に隠された“unnatural”な何かを、公的な領域にさらけ出そうとしたことは、当然の行為であったといえる。それは、Criminal Law Amendment Act という法と結びつく、ジャーナリストイックなセクシュアリティの統制の言説なのである。

他方、ワイルドの反論には、直接的に(ホモ)セクシュアリティに言及したものはないが、各紙の批判と並べて見るならば、個人、芸術、快楽という語の結びつきは、(ホモ)セクシュアリティを私的な領域に囲い込む動きと考えられる。同時に、芸術、道徳論争を通して自らそれを脱構築するのは、これまで指摘した通りである。彼はまた、『ドリアン・グレイの肖像』の中に Standard, Globe, St James's Gazette といった新聞を登場させている。論争においては、この小説はセンセーショナルな出来事に満ちあふれていると、ジャーナリストイックな要素を口にする。さらに Scots Observerへの手紙において彼は、“ethical beauty”(Letters, 269)という語さえも使い、芸術と道徳の領域を重ね合わせる。こうした境界の浸食、両義的な戯れは、ワイルドとジャーナリズムの関係そのものである。芸術を私的なものと見せながら、そして、ホモセクシュアリティを私的な快楽と見せながら、彼はそれを公的な領域、社会的な場へと晒すのである。これはワイルドの構築主義的な思想を照らし出している。Jonathan Dollimoreは次のように論じている。

Wilde recognizes the priority of the social and the cultural in determining not only public meaning but ‘private’ or subjective desire. This means that for Wilde, although desire is deeply at odds with society in its existing forms, it does not exist as a pre-social authenticity; it is always within, and informed by, the very culture which it also transgresses. (11)

ポスト構造主義者的な思想を先取りしたワイルドはフェミニズムのスローガンの一つ「私的なことは政治的なこと」ということを認識していたといえる。“Nature imitates Art.” という一節も、シニフィアンを元にした意味生成、構築主義の表出

である。「社会主義下の人間の魂」において、個人主義を本質主義的に唱道しながらも、“The only thing that one really knows about human nature is that it changes.”(1194)と脱構築するのがワイルドである。Criminal Law Amendment Actという法が、“public”と“private”的領域を侵食したことに対応するかのように、ワイルドにおいても、私的なホモセクシュアリティが公的な領域と交錯する。そのような動きを通して、ジャーナリズムや法が行使する統制的、抑圧的なセクシュアリティの言説と両義的に戯れ、ホモセクシュアリティをその地場に流通させようとするのである。

ワイルドのこうしたポリティックスは、彼とゲイ雑誌との関係にも見受けられる。Brian Readeが指摘するように、19世紀末には、ホモセクシュアリティを柱としたといえる雑誌がいくつか出版された。*The Artist, or the Journal of Home Culture*、*The Spirit Lamp*、*The Chameleon*といった雑誌がそれに当たる。ワイルドは後者の2つに計4つの作品を掲載しているが、例えば*The Spirit Lamp*に掲載された“The New Remorse”はホモエロティックな欲望を示唆しているように思える。しかしながら、この詩とほとんど変わらないものが、別のタイトルで1887年の12月に*Court and Society Review*に掲載されている。この雑誌は、「カンタヴィルの幽霊」や「アーサー・サヴィル卿の犯罪」、それから“The American Invasion”などの評論を掲載している雑誌である。そうだとするならば、ワイルドはこのようなホモエロティックな詩をより公的な場に開いているといえる。こうした戯れは、私的な領域に近接するゲイ雑誌と中流階級的な公的な雑誌といった境界をなくすものである。民衆から、ジャーナリズムから、中流階級のイデオロギーから、芸術を、そして“unnatural”なセクシュアリティを私的なものとして守るようにみせながら、ワイルドはそれを脱構築させ、ジャーナリズムという公的な領域に戯れを通して参与していく。そうすることで、ワイルドはホモセクシュアリティを社会的な場に密かに散種させるのである。

## \*

ワイルドの戦略は、単に世紀末の異性愛体制との闘争を示し出す過去の物語ではない。それは、重要な今日の二つのゲイ戦略に対応している。その一つは、カミング・アウトである。これは、私的なクローゼットから公的な領域に踏み出す行為であり、社会にゲイの存在を認めさせるものである。ホモセクシュアリティをジャーナリズムという公的な空間に関与させるワイルドの動きとは、まさにカミング・アウト的なものといえる。しかしながら、カミング・アウト戦略は、ゲイのゲットー化に繋がる側面を孕んでいる。すなわち、異性愛体制における権利

獲得と同時に、異性愛体制との非連続性、他者性を自ら作り出してしまい、結果的にホモフォビアを温存しかねないのである。これは、本質主義に結びつく要素を含んでおり、ホモセクシュアリティを異質な種として排除する制度を補強してしまう。それは、ホモセクシュアリティを、生産し可視化することを通して周縁化する異性愛体制を逆説的に支えてしまうのである。

このカミング・アウト戦略と対をなすのがパッシング戦略である。これは、異性愛体制の中に拡散、浸透することで、異性愛体制を揺るがすものである。それは異性愛体制との連続性の示唆を通して、両者の境界を浸食していく。ジャーナリズムを利用しながら、ホモセクシュアリティを不在として流通させ、セクシュアリティの構築性を問題化するワイルドの戦略はこれに相当する。もちろん、私的な欲望を公的に暴露しようとしたジャーナリズムと法というイデオロギーに対して、自己検閲も働いていたといえる。しかしながら、ワイルドのポリティックスとは、消極的なパッシングではない。それは、そうした抑圧的なイデオロギーとの戯れとして立ち現れる。パッシングが眞の意味でパッシングのままでいるならば、それは異性愛体制を揺るがすことにはならない。逆に、ホモセクシュアリティは声を奪われ、消滅してしまうからである。そうであるならば、パッシングはカミング・アウトと補完的に用いられたときに効果を持つといえる。すなわち、隠しつつ開示する、“public”と“private”的空間を絶えず行き来する。これは、ワイルドが『ドリアン・グレイの肖像』や『W.H.氏の肖像』において行った戦略であり、ジャーナリズムとの両義的な戯れに浮かび上がる戦略である。“Wilde wrote a transgressive literature which thrives on the conditions of oppression and yet courted the approval of the oppressor.”(175)というGregory Woodsの指摘通り、ワイルドは、芸術そしてホモセクシュアリティを、中流階級のイデオロギーに支えられた民衆とジャーナリズムに差し向ける。そうすることで、異性愛体制を根底から攪乱するのである。

『ウィンダミア夫人の扇』の初演において、ホモセクシュアリティを意味する緑のカーネーションを友人とステージ上の登場人物に付けさせたことはよく知られている。これは異性愛体制のなかに、ホモセクシュアリティをパッシングせながら、カミング・アウトさせたエピソードといえる。ワイルドは、芸術とホモセクシュアリティをゲットー化させていない。私的なものとして昇華させる身振りの中で、公的な領域を開いていく。それは、消費社会に参入せざるを得ない、ジレンマを抱えたブルジョワ的な主体というよりは、両義的な言説に両義的に戯れながら、境界を浸食していくクイアな主体である。

結局、ワイルドは裁判とその報道という公的な力によって、公的な場に引き出され、ある意味でカミング・アウトさせられた。それによって、ホモセクシャリティの言説がワイルドの身体を中心に形成され、スティグマを背負った他者へと周縁化された。100年以上たった今でも、異性愛という社会制度はそうしたイデオロギーを生産し続けている。しかしながら、彼を殉教者とし、ホモセクシャリティをゲットー化することは、彼の戦略を見逃すことになりかねない。ワイルドという19世紀末の歴史的なテキストが21世紀に示唆してくれるのは、それを越えたものである。それは、境界との戯れを通じて、クイアな主体による異性愛体制の脱構築なのである。

## Notes

- 1 安価な新聞や雑誌への歴史については Altic を参照。
- 2 Cohen は次のように述べている。“Not surprisingly, the ‘Maiden Tribute’ articles were incredibly popular — appearing almost immediately in a widely circulated pamphlet form — and catalyzed public opinion in favor of legislation restricting male sexual access to young women. The expression of public outrage at what was perceived to be the incursions of privileged men on the relatively vulnerable bodies of working-class women culminated in a massive public demonstration (estimated at over 250,000 people) in Hyde Park on 22 August. The result was the swift passage of the Criminal Law Amendment Act.”(91)
- 3 Thain は次のように述べている。“So the moment at which art claims to exist apart from moral and economic forces within society is also the moment at which art becomes truly engaged with a consumer culture as well as figuring a new kind of moral framework. This aesthetic/economic paradox is summed up in the physical appearance of Decadent volumes of poetry, many of which were issued in limited editions, of good quality binding and fine design. Such expensive production satisfied a double imperative: on the one hand these are designed precisely not to appeal to a mass market . . . but on the other, the very commodification of the text in the fine wrappers (often silk, gilt and leather) is a recognition of, and pandering to, consumer desires.”(229)

## References

- Altic, Richard D. *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900*. 2nd ed. Columbus: Ohio State UP, 1998.
- Brake, Laurel. *Subjugated Knowledges: Journalism, Gender and Literature in the Nineteenth Century*. New York: New York UP, 1994.

## “public”と“private”的戯れ

- . “The Discourses of Journalism: ‘Arnold and Pater’ Again — and Wilde.” *Pater in the 1990s*. Ed. Laurel Brake and Ian Small. Greensboro: ELT Press, 1991. 43-61.
- Cohen, Ed. *Talk on the Wilde Side: Toward a Genealogy of a Discourse on Male Sexualities*. New York and London: Routledge, 1993.
- Diamond, Michael. *Victorian Sensation or the Spectacular, the Shocking and the Scandalous in Nineteenth-Century Britain*. London: Anthem Press, 2003.
- Dollimore, Jonathan. *Sexual Dissidence: Augustine to Wilde, Freud to Foucault*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- Eagleton, Terry. *Heathcliff and the Great Hunger: Studies in Irish Culture*. London: Verso, 1995.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Penguin Books, 1987.
- Fraser, Hilary, Stephanie Green and Judith Johnston. *Gender and the Victorian Periodical*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Gagnier, Regenia. *Idylls of the Marketplace: Oscar Wilde and the Victorian Public*. Stanford: Stanford UP, 1986.
- Gillespie, Michael Patrick. *Oscar Wilde and the Poetics of Ambiguity*. Gainesville: University Press of Florida, 1996.
- Hart-Davis, Rupert ed. *The Letters of Oscar Wilde*. London: Rupert Hart-Davis Ltd, 1962.
- Reade, Brian. Introduction. *Sexual Heretics: Male Homosexuality in English Literature from 1850-1900*. Ed. Brian Reade. New York: Coward-McCann, 1971. 1-56.
- Rose, Jonathan. “Education, Literacy, and the Victorian Reader.” *A Companion to the Victorian Novel*. Ed. Patrick Brantlinger and William B. Thesing. Malden: Blackwell Publishing, 2002. 31-47.
- Sinfield, Alan. *The Wilde Century: Effeminacy, Oscar Wilde and the Queer Moment*. London: Cassell, 1994.
- Stead, W. T. “The Future of Journalism.” *Victorian Print Media: A Reader*. Ed. Andre King and John Plunkett. Oxford: Oxford UP, 2005. 323-329.
- . “The Maiden Tribute of Modern Babylon.” *The Fin de Siècle: A Reader in Cultural History, c. 1880-1900*. Ed. Sally Ledger and Roger Luckhurst. Oxford: Oxford UP, 2000. 32-38.
- Thain, Marion. “Poetry.” *The Cambridge Companion to the Fin de Siècle*. Ed. Gail Marshall. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 223-240.
- Rev. of *The Picture of Dorian Gray*. *Scots Observer* 5 July 1890. *Oscar Wilde: The Critical Heritage*. Ed. Karl Beckson. London and New York: Routledge, 1970. 74-75.
- Wilde Oscar. “The Soul of Man under Socialism.” *Complete Works of Oscar Wilde*. Glasgow: Harper Collins, 1994. 1174-1197.